香美市立美術館
アートの窓

「筒井広道 追悼展」
2月13日（土）～3月28日（日）

　高知県を代表する画家の一人であり、また県の美術振興に大きな功績を残した教育者でもあった筒井広道は、２００８年10月31日に96歳で逝去しました。今回の追悼展は、芸西村筒井美術館、四万十町立美術館と当館の３館合同特別展として開催することになりました。

　１９１２年芸西村生まれの筒井広道は、１９３７年東京美術学校（現・東京芸術大学）西洋画科を卒業し、一水会、日展で活躍しつつ、県内でも高知県展洋画部門の審査員を務めるなど、県芸術文化振興に貢献し、１９６６年高知県文化賞、１９８６年県展功労賞を受けています。１９９６年には出身地である芸西村に芸西村筒井美術館が開館し、筒井作品が常設されています。

　高知大学在職中は多くの門下生を育て、教え子の皆さんは県内外で広く芸術家、美術教育者として活躍しています。高知大学退職後も、高知県美術家協会会長を長く務め、後進の育成に力を尽くしてきました。

　今回、当館には、海辺の群像、ヨーロッパ風景、自宅近くの風景の油彩画約30点が並び、筒井作品の魅力を堪能していただける展覧会になっています。また、会期中は教え子の皆さんのご協力を得て、週がわりでロビー展と、各日曜日午後1時30分よりギャラリートークを開催いたします。

　多くの皆さまのご来館をお待ちいたしております。

（館長・北　泰子）

◀「椿の木のある風景」
　写真の油彩画は筒井が生前に、一番気に入ってアトリエの壁に掛けていた作品です。筒井作品と言えば、ふる里・芸西村の海をバックに描かれた浜辺の人々の群像が知られていますが、晩年は自宅近くの風景も多く描いています。この作品もその中の一点であり、美しい空の青、遠景の黄色、手前の黄味がかった灰色をバックに、椿の木の深い緑、赤い花が静かな対称を見せており、何気ない身近な風景が、実に味わい深い、心にしみる素敵な風景画になっています。

風の流れ 番外編 こども俳句

秋がきた朝はひやいながまんする　２年　北村　遥
てんとう虫おちばのふとんでねていたよ　２年　髙橋　真衣
秋がきたいっぱい遊んで楽しいな　２年　滝口　愛実
ふんわりときんもくせいがいいかおり　２年　西尾　美槻
ふと見るとモミジのカーテンかかってた　２年　西熊　藍
きのこだよエノキになめこにおいしそう　３年　公文　空知
秋になりあけびぶらぶら楽しみだ　４年　西熊　大地
あと五分いさせてほしい夢の中　５年　西尾　綾佑
もう秋とオリーブの実は紫に　６年　近藤　結衣
紅葉が山をそめてた寒霞渓　６年　髙橋　若菜
ハートの葉幸せになれ秋の風　６年　萩野　祥大
走ったよエンジェルロード秋の暮　６年　宗石佳梨夢
かわら投げピッチャーなのに入らない　６年　小松　里都
紅葉にわぁっと大声寒霞渓　６年　森田みゆき
コスモスといっしょにゆれる映画村　６年　山崎　由貴

　大栃小学校では毎月俳句を作成し、高知新聞の俳句のコーナーなどへ投稿を行っています。今回、本誌へ投稿がありましたので紹介します。６年生は、小豆島と広島に修学旅行に行ったことを俳句にしています。

香美市文芸
風の流れ

広報委員会　選

◆一般投稿作品◆

初雪や紅梅の花白く染み　岡村　和躬
柿食いしヒタキはり合ふ遊歩道　太　幸
木洩日に色濃く咲けり石蕗の花　原　美幸
視力障害の夫に紅葉を説明す　小原　子川
紅葉をテレビにて知るわれの日々　小原　景守
しんさけに檜の升の匂い満つ　中村　辨吉
旅をせし頃が偲ばる紅葉かな　有澤　春江
腕枕ネコ眠りぬ師走の夜　小野寺朱実
春障子生まれくるもの逝きしもの　森本　幸美
贈られし数の子浸けて年迎ふ　岡田美代子
未知と言う白のまぶしき初暦　森本　純喜
北山に脱藩の雲十二月　福留とものり
息を詰め腰を延ばして煤払い　山﨑　寿美
生姜堀り鋏の早技茎積る　高野　和一
すれ違ふ祖父によく似し頬かむり　山崎　貴子
救急車のサイレン遠く寒の夜　北村千鶴子
帰り来し子に豊かなる柚子の風呂　千頭　野草

◆かがみ野俳句会◆

黄落やころころ笑ふ巫女溜り　佐竹　洋子
べふ峡の岩に背伸びの冬すみれ　鍵山　和枝
病む夫に又明日来るねと秋夕焼　佐藤　幸
黄落の舞ふは我が影居場所なく　利根　弘子
お茶の実の爆ぜて坂道音まろぶ　古川　信子
眠る家まだ灯る家冬の月　小松　愛子
枯菊を焚きて匂ひと戻りけり　中澤　美晴
匂ひくる隣も秋刀魚我が家でも　森本　倢代
子を思ふ詩に一涙秋の風　山﨑　鈴子
切り株の温もりに座し遠紅葉　吉田　芳

◆韮　句　会◆

はるかなる海のきらめき勇魚くる　公文　春紀
明日からの雪の予報に薪割る　岡本かほる
墓地公園桜の蕾ふくらみて　高橋　章
凋みつつ色失わぬ烏瓜　篠崎　亜希
変る世を龍馬高処の懐手　北村　幸子
一豊の槍の騎馬像冬紅葉　甲藤　卓雄
歳晩や社務所の裏の添水鳴る　野崎　典子
束の間の夕映え染みし古暦　北村　里子
嶺一つ越して出合ひぬ冬紅葉　明石　英子
賜ひたる白菜ややこ抱きしかに　竹内　ろ草

◆かほく俳句会◆

墓掘りの酒まはし呑む焚火かな　乾　真紀子
神迎ふ御在所山へ夫婦鯛　奥宮さとみ
縁側の日差し一番冬至かな　黒岩　幸女
あと戻り出来ぬ齢や十二月　黒岩千英子
凩の通り抜けたる朝稽古　小松　完
植ゑ捨ての棚田一枚冬すみれ　小松志津男
山茶花の垣根の山家人住まず　小松　隆之
小春日や妻を散歩に誘ひ出す　小松　昇
晴晴れと赤き布団を干しにけり　野村　里史
安寧や眠りきったるうしろ山　前田　欣一
穏やかな日和授かる師走入り　前田　秀女
冬紅葉茶屋に番頭たりし日も　間崎　和代
年末ややっさもっさに新区長　森本　之子
咲き満ちて山茶花の白華やがず　山崎かずみ
冬鳥を呼べば応へて身ほとりに　山中　晶子
木守柚子要らない物は要らぬなり　山中　瑞輝
亡き父母の手植ゑし庭の石蕗明かり　山中　明石
独り居の母の入院冬に入る　杉山　春萌

◆土佐山田町俳句会◆

三宝といふ神多し雪の峡　明石　韮生
唐辛子干してあしたは東京へ　前田　小夜
小春日の急くことのなき針仕事　前田美智子
指差してまた指折って年用意　大石　邦男
茶の花や箪笥の中の母の文　森田　菊恵
木守柿雲の上行く飛行音　中沢としみ
奥土佐の青鹿跳ねて雪になる　安丸　槙子
折り紙のきりん冬日のどこに置く　橋本　昭和
浮雲の底の暗らみや時雨きし　西川　常夫
坊主鮴わが幻の少年期　樫谷　雅道
元日や有り明けの月真ん丸く　馬場　英男
ねこじゃらし枯れては人を恋しがる　田村　一翠

今月のキラリ
黄落やころころ笑ふ巫女溜り
秋色に色づく中、緋の袴をつけた巫女たちの明るい声が聞こえてくる色彩豊かな句。

俳句・短歌の投稿方法
▼投稿方法は自由。（ただし、ハガキで投稿の場合、一人一枚のハガキで5句（首）以内）
▼かい書で、住所、氏名、電話番号を必ず明記してください。
▼俳句は偶数月、短歌は奇数月に掲載します。掲載月の前月の1日までに投稿してください。
▼誌面の都合により掲載されない場合があります。なお、選者の添削を不要とする方は添削不要と記してください。

【投稿先】企画課内広報委員会事務局「俳句・短歌」係
〒782－8501（住所不要）　FAX 53－5958